

ソーシャルIoTの到来を誘引するスマートスピーカー

2017.12.1 発行

2017年はスマートスピーカー元年

アマゾンジャパンより、日本語に対応した待望の Amazon Echo(エコー)が先月15日に発売されました。Amazon Echoは、いわゆるスマートスピーカー(もしくはAI(人工知能)スピーカーとも称する)の先鞭を切った製品であり、本国アメリカでは2014年11月から‘音声制御のWi-Fiスピーカー’という触れ込みで発売されました。その後、続々と似たような製品がIT主要各社から発表され、音声AIをキーテクノロジーする‘スマートスピーカー’という市場を形成し始めました。

(図表1) 主要スマートスピーカー一覧

メーカー	製品	発売日	日本	価格
Amazon	Echo	2015.6(米)	2017.11	5,980円～
Google	Google Home	2016.11(米)	2017.10	6,000円～
Microsoft	Invoke	2017.10(米)	-	\$199.95～
Apple	HomePod	2018予	-	\$349
Line	Clova	2017.10(日)	2017.10	14,000円
Samsung	Vega	-	-	-
Alibaba	Tmall Genie	2017.7(中)	-	499元

出所:明治安田アセットマネジメント作成

スマートスピーカーとは？

スマートスピーカーとは、音声によって様々な処理を行ってくれるものです。指向性の強いマイクが複数搭載されており、数メートルは離れた場所から音

声を拾い上げることができ、例えば、今日の天気を聞いたり、洗剤を注文したりなど、いわゆるコンシェルジュのような役割を果たしてくれます。無論、パソコンやスマートフォンでも事足りますし、そもそもロボットのように動くことはありません。しかしながら、音声操作のみでインターネット上の情報を取得できたり、音楽をかけたりと、パソコンの起動や片手スマホといった物理的制約から解放されるメリットが生まれます。

(図表2) スマートスピーカーの仕組み



出所:総務省資料をもとに明治安田アセットマネジメント作成(改編)

加えて、Amazon Echoの場合は、Alexa Voice Service(AVS)という音声サービスのAPI(プログラムのインターフェース)を公開しており、パートナー企業はAlexa(アレクサ)と同期できる製品を開発できる仕組みを構築しています。つまり、音声AIであるAlexaに対応していれば、家電製品からドアに至るまで音声操作が可能となります。実際、ロボット掃除機ルンバでは、「Alexa、ルンバを使って掃除して！」

当資料は、ホームページ閲覧者の理解と利便性向上に資するための情報提供を目的としたものであり、投資勧誘や売買推奨を目的とするものではありません。また、当サイトの内容については、当社が信頼できると判断した情報および資料等に基づいておりますが、その情報の正確性、完全性等を保証するものではありません。これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いかねます。

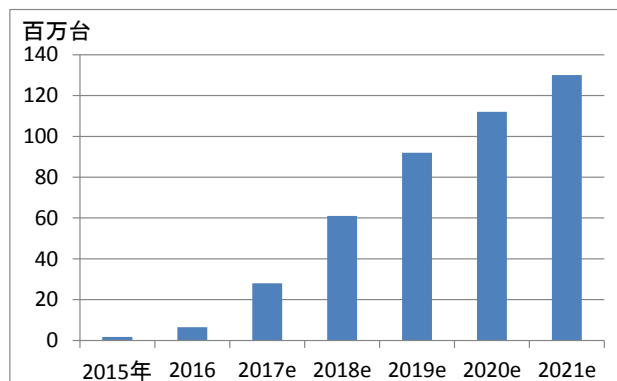
アナリスト・コラム

と音声で伝えるとルンバが起動し、お掃除をしてくれるのです。また、ハードのみならず、サービス分野でも Alexa 対応が進みつつあります。住信 SBI ネット銀行では、Amazon Echo を使って、残高紹介や為替レートを音声で知ることができるサービスを開始しました。まだ、スタートアップサービスの段階ですから、これ自体にニーズがあるとは言えませんが、将来的にはさらに踏み込んだフィンテックサービスが可能となるでしょう。また、家庭内に限らず、クルマでも Alexa 対応の開発が進むなど、音声 AI 技術の覇者争いは水面下で進んでいるのです。

2020 年には年間 1 億台規模の市場へ成長する可能性

米国の調査会社である Strategy Analytics 社では、2017 年のスマートスピーカー世界出荷台数は 2,400 万台(前年比 4 倍)になるとの見通しを示しており、内、約 7 割が Amazon Echo、2 割が Google Home になるとしています(2017 年 9 月発行レポート)。また、米国調査会社の Forrester 社の最新レポートでは、米国内でのスマートスピーカー普及予測として、2022 年には 6,630 万世帯の家庭が保有し、世帯普及率は半数を超えるとの見通しを示しています。なお、当社では 2020 年には出荷台数 1 億台を突破する可能性は十分にあると見ています。

(図表 3) スマートスピーカーの市場規模予測



出所:明治安田アセットマネジメント作成

ホーム IoT からソーシャル IoT への進化

当面のスマートスピーカーの技術的な位置づけを考えると、「家庭内 IoT のハブ」、つまり『ホーム IoT』のキーデバイスになると考えられます。無論、この点に限ってみれば、人によってはスマートスピーカーに価値を見出すことが難しいかもしれません。しかしながら、産声を上げたばかりのスマートスピーカーの機能自体は序章にすぎないという点は十分に認識すべきでしょう。というのも、今後の音声 AI 技術はさらなる進化を遂げ、スマートスピーカーが単なる『ホーム IoT』から人-モノとの高度な双方向コミュニケーションを可能にする『ソーシャル IoT』を実現するツールへと変貌する可能性があるからです。

実際、Facebook では、今年 5 月に AI とボット(自動で作業を行うプログラムの総称)のプラットフォームである「ParlAI(パール AI)」の立ち上げを発表しました。これは、最終的に人間と機械が、自然に会話ができることを目標としたもので、こうした AI による対話技術「チャットボット」は、世界中で開発が行われています。日本でも、「旦那・・・」の質問に対する答えが話題となった横浜市の「イーオのゴミ分別案内」も NTT のチャットボットを活用したサービスです。

将来的にスマートスピーカーは、「暑いからエアコンつけて！」ではなく、「お帰りなさい、暑いのでエアコンでもつけましょうか」と聞いてくるかもしれませんし、ちょっとした悩み事の相談に乗ってくれるかもしれません。高度なチャットボット機能を搭載したスマートスピーカーが、自分の「良き相棒」となる日がそう遠くない時代にやってくるのではないのでしょうか。

国内株式運用部調査担当 シニア・リサーチ・アナリスト
(エレクトロニクス、ゲームソフト担当)
久保井 昌伸

当資料は、ホームページ閲覧者の理解と利便性向上に資するための情報提供を目的としたものであり、投資勧誘や売買推奨を目的とするものではありません。また、当サイトの内容については、当社が信頼できると判断した情報および資料等に基づいておりますが、その情報の正確性、完全性等を保証するものではありません。これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いかねます。